

たより

『美紗の会』 ニュース

第25号

平成九年九月十五日

発行者
「美紗の会」
03-3441-2726
編集責任者
川邊紀恵

十五周年を迎えて

西松布咏

昭和五十八年に発足した美紗の会が、今年十五周年を迎えることになりました。十年ひと昔と申しますが、もうひと昔半が過ぎてしまったのだと感無量でございます。勤めの傍ら学生時代の友人がはじめに弟子になってくれ暗中模索しながら始めた師匠生活も二十数年になろうとしています。六才で邦楽界に入りました。六才で邦楽界に入りました。古い慣習の中で悶々としたこともありましたので、私の主宰する会は、こうありたいと自分なりの夢を描きながら歩いてまいりました。こうした未熟な私の芸と人間を育てて下さったのは、美紗の会の会員はじめ皆様のお蔭と厚く御礼申し上げます。又稽古の傍ら運命的な出会いの師であつた西松文一師の跡を継ぎ布咏の名で国内のみならず海外での演奏活動・リサイタルを始めとする種々の催しにも暖かい御理解を賜り、とます

と狭くながちな伝統音楽の枠を抜ける活動が出来ますことを嬉しく思っております。おさらい会は日頃のお稽古の成果を発表すること・会員相互の親睦をはかることを motto とし、小さな会を重ねてまいりましたが、そろそろその出来ばえを皆様に御披露致したく、ささやかではございますが、十月十二日(日)青山メトロ会館において十五周年の会を開くことになりましたので皆様の耳をそこねる(?)ことはないと思っております。演奏会の後は、会場を変えて「感謝の集い」のパーティーを用意しております。会員の田島綾子さんのご主人がギターのデュオで現在静かなブームのタンゴ演奏をして下さる他、岡崎会長の華麗なる獅子舞など趣向をこらして、皆様と共に楽しいひとときを過ごしたいと存じます。

どうぞ万障お繰り合わせの上ご来場下さいますようお願い申し上げます。

日時

平成九年十月十二日(日)

ところ

地下鉄外苑前 青山メトロ会館

時間

演奏会 十三時—十七時四十分

パーティー

十八時—二十時

長月に思ひつゝ

「風立ちぬいざ生きめやも」*暑かつた今夏も九月の声を聞く朝の涼しさに、ふとこの句を思い出す*今秋には美紗の会の15周年記念の集いが予定されており、我々会員も日頃の練習の成果を友人知人に披露することになった。*筆者も数えてみれば入会して12年経つ。*京都●染織家の長男に生まれ、春は御室仁和寺の花見、夏は嵐山で虫やセミを捕り、秋は高雄の紅葉狩り、師走には祖母につられて南座の顔見せを見た*戦後少し生活にゆと

りが出来た頃わが家では両親と姉が三味線を習い始めたが、どういふ訳か自分は(洋楽に興味があつて高校のブラスバンドに籍を置いたことがあつた)邦楽はなじめなかつた。はつきり言えばかつこよい趣味とは思へなかつた*それが会社の朋友橋本・浜本両君の何年越しかの勧誘に根負けして美紗の会に入会し、西松布咏師匠の指導を受けている内に12年も経ってしまった。*自分ほどちらかといえれば何事も熟慮した上で行動しているつもりだが、小唄だけは自

新人紹介

友国八郎氏

今年古希を迎えたとは思えぬ程、ゴルフや水泳で陽焼してとてもお若い友国氏。この六月に赤坂組の先輩弟子から推薦入門を許されただけあつて商船三井の前会長。現在相談役という要職にありながら、少しも尊大なところのないきさくなお人柄。「私は新入り弟子ですから」と月曜日の稽古には、早くから正座をし神妙に稽古に励んでおり、先輩から、早くも強敵現われと言われているとか。出身地は兵庫県須磨。小学校の同級生

会主後期スケジュール

10月14日

佐野美術館隆泉苑 六時開演

「大岡信と閑崎ひで女」

十三夜を語り舞ふ

白酒・茶音頭・残月

尺八の宮崎青歌氏

と共に地方演奏

10月22日 清麗会

国立小劇場 六時開演

閑崎ひで女 御所のお庭

閑崎清女 申縁の月

胡弓の小原清歌氏

と共に地方演奏

11月4日(14日) パリ公演

新装の日本文化会館において

閑崎ひで女・清女による

残月・菊の露・鉄輪・ゆき

の地方演奏



ハンブルグ演の想い出

ドイツを初めて訪れたのは平成五年九月。ベルリンは、もう秋の気配だった……と思

いながら機上の人となった。今回の公演はハンブルグ。ドイツ北西部にあるドイツ最大の貿易港でなかなか活気のあるところと聞いて、訪れるのを楽しみにしていた。空港から三十分程タクシーに乗り、地味で落ち着いたなかにも洒落た建物が浮かんで消えてゆく景色に見とれているうちにエルベ湖畔のインターコンチネンタルホテルに着いた。そこは想像していた港町ではなく静かな湖面をたたえた高級リゾート地だったので、まるで避暑に訪れたような気分になった。翌日クリスチヌという可愛い女性の案内で会場に行った。レディスハーマニアルフエスティバルは一年前に発足し当時は、フェミニスト運動という政治的なかわりもあつたが、今では純粹に芸術的な女性の演劇舞踊祭という市をあげての催しになっていった。主催は女性陣であるが、サポートは男性がするといふ大規模なもので広い会場には事務所・ロビー・写真展広場・食堂・楽屋が完備している。ベルリンでは古城の中にある歴史の重さを感じさせる劇場だったけれどハンブルグの会場は、カ

ンブナーゲルという倉庫をそのまま利用して天井は見上げ程高く、あちこちにロフトがむき出しになっているといったアヴァンギャルドな雰囲気である。ニューヨーク・パリ・ウズベキスタン・リヨンからの催し物にまじってわが地唄舞公演は六月二十日・二十一日八時半からの二回公演。演目は閑崎ひで女・清女師による茶音頭・ぐち・鉄輪・ゆきであつた。公演前日の夜は、エルベ湖畔のレストランでドイツ料理を楽しんだが、夜もつぶり更けた帰りが道を冬を思わせる冷たい風が吹き身体がすっかり冷えてしまいいわゆるベッドへもぐり込んだ。腹痛がして熱が出てのどが痛くなった時は、目の前がまっ暗になり夜中に何度邪薬を飲んだりして眠れぬ夜だった。いつものことであるが地方は舞の引き立て役。弾き語りの私の役目は特に重くそのプレッシャーは大変なものである。翌日の八時半までホテルから一歩も出ずひたすら体調の回復を願った。その願いが通じたのか心配した声も思いの他出て公演は大成功だった。一日目は二百人の席が満席、二日目は補助席が出る程の盛況だった。ドイツ人は日本人に似てあまり感情を

表に出さず物静かである。舞台のすそで出を待っている私達は、客席があまりに静かなのでお客が集まらないのでは？と心配したが、大勢の観客は静かに開演を待っていてくれた。そして舞台が暗くなり演奏が始まると、まさに水を打ったような静けさが波のように拡がり、私の声がすみずみまで響き渡った。おそろしく白化粧で髪を被り裾を引いた着物姿での地唄舞は初めてだろうが、この観客は異文化を尊敬し興味深く、そして理解しようという熱い空気が漂っていた。私は拍手のうずい出した目頭が熱くなる程嬉しかった。その余韻にひたっている間もなく今度は「日本音楽の夕べ」に出演の為暗い廊下を歩いて次の会場へ向かった。先程の静かな緊張とはがらりと変わってワインやウイスキーのカウンターのある酒場のような雰囲気の中で尺八・琴・三味線とかかわるがわる演奏した。私は「ハンブルグの夕暮れ」の即興演奏を皮切りに「夕暮れ」・「キリギリス」・「東の関」・そして最後にウエスリン大学でのコンサートで好評だった北園克衛の「ブルー」を唄った。ここでも割れるような拍手だったけれど、酒を飲むと傍若無人

になるとこの国とは違って節度ある陽気さが心地良かった。二つの講演を終えて時計を見ると十二時すぎ。帰って早くシャワーを浴びたかったけれどクリスティーヌが、打ち上げ会をしているからと誘うので食堂へ暗い部屋にろうそくの灯が揺らぎ、それぞれのスタッフがワインを飲んで談笑している。通じない言葉より身ぶり手ぶりでお互いの気持ちを伝えようとするこの瞬間が、とても楽しかった。ドイツを離れる前日に元木村大使が晩さん会を開いて下さった。場所はコンチネンタルホテルの最上階のレストラン。窓から夕闇のとばりが降りようとすると湖の水面がキラキラ輝いている。グラスを傾けながらねぎらいの言葉をいただいて、今が旬というホワイトアスパラやヒラメのムニエルを味わう至福のひとつきーユーモアのある元大使が冗談に「ハンブルグの赤線地帯を見なければハンブルグに行ったらとは言えないですよ。」と言いのを聞いて今回はエルベ湖の神秘的な美しさに包まれた不思議な旅だった……と静かに暮れてゆく湖を眺めながら思った。

「ダイアナ」と「ゆき」

九月六日ダイアナ元妃のウエストミンスター寺院での葬儀をテレビで観た。恐らく世界中の人々が、同時にこの映像を観ているだろうと、メディアの可能性の凄さを、つくづく思った。しかし全てを可能にしてしまうかのような現代でありながら、「人間の心」だけは、なかなか思うようにはいかない。世紀の結婚と言われ美貌・若さ・地位・子供・全てを手にしたかのようなダイアナ元妃も、夫チャールズの心だけは、つかめなかった。そして今度こそとつかんだ愛は、交通事故と共に神に召されてしまった。生前ダイアナのスキヤンダラスな記事は、毎日のように新聞を賑わした。そして全世界の人々が一挙一動を眺み見した。それは決して彼女の幸せを願ったからではないだろう。今度は、どんな破天荒な恋をするのだろうか？といった興味からではないだろうか？。そして世界を騒がせた美女が、悲劇の事故死の瞬間から、人々の心が哀れみ悲しみに変わっていった。葬儀の中でエルトンジョンが「キャンドルインザウインドウ」を唄ったが、この唄は、マリリンモンローへの哀悼歌だったという。(僕はあなたの一生が、風の中に置かれたろうそくのように思えます。雨が降っても誰に

すがりついていいかを全く知らない一本のろうそく。)ベッドの上で、ひとり燃えつきたろうそくのように死んでいったモンローに較べたらダイアナは幸せだったのではないだろうか？ 婚約をした最愛の人と真紅のバラのように燃えさかるろうそくの炎の中で天に召されたのだから——それにつけても最近レコーディングの為に毎日のように唄っている「ゆき」の世界とあまりにも違う——といついつい思ってしまう。花も雪も払えば清き袂かな。ほんに昔の昔のことよ。我待つ人も吾を待ちけん——男に裏切られた芸者が、未練や浮世の煩惱を絶ち切るために髪を切り、仏門に入る。迷い苦しみがながらも男への愛を昇華させひとり雪の中で静寂の世界へたどり着こうとする女の究極の美——

「すべては寂に還り寂に発す」この地唄の本質が人々の心をゆさぶるのではないだろうか。だからこそ時代を超えて国境を越えて「ゆき」は永遠に唄い継がれてゆくのだと思う。

ダイアナ伝説もこれからそうなるのであろうか——？

(N・F)

